

R

KANSAI UNIVERSITY NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. **39**

November, 2014

関西大学ニュースレター
発行日：2014年(平成26年)11月25日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>

この伝統を、超える未来を。



地方創生に向け、改革の先頭を行く 国家戦略特区・ 養父市の挑戦と連携

■対談 広瀬栄 養父市長 × 楠見晴重 学長

■リーダーズ・ナウ ー5
在学生— 文学研究科 博士課程前期課程
総合人文学専攻 1年次生
上田 裕人 さん / 北嶋 未貴 さん
卒業生— 古書善行堂 店主
山本 善行 さん

■研究最前線
情報探索過程に関する研究
人は情報をどのように探すのか ー7
文学部 — 渡邊 智山 教授
文化資産のコンテンツ化の研究
大岡春卜の絵巻物コンテンツを開発 ー9
総合情報学部 — 林 武文 教授

■トピックス [学内情報] ー11
梅田サテライト・オフィスがオープン
新設の弁護士法人と連携し、新たなサービスを提供
天六キャンパス クロージングイベントを開催
85年の歴史に思いを馳せて
明日香村・関西大学による都塚古墳の発掘調査
国内で類例を見ないピラミッド形大型方墳と判明
文部科学省・平成26年度の支援事業等に、
本学の研究プロジェクト2件及び教育プログラム2件が採択

■社会貢献・連携事業/地域連携 ー13
カネカ、一栄、富士ハイテックとの共同開発
世界初！ エノキタケ由来不凍多糖の量産化に成功
第19回「かんがたい 明日香 まほろば講座」を開催
明日香村との地域連携事業で、川原寺をひもとく ほか

■関大ニュース ー15
オンライン教育サービスJMOOC「gacco」で
『化学生命工学が作る未来』の配信を開始 ほか

SAKAE HIROSE

国家戦略特区・ 養父市の挑戦と連携

地方創生に向け、改革の先頭を行く

広瀬 栄
・養父市長
楠見 晴重
・学長



次世代の農業の担い手をいかに育てるか

2014年8月、関西大学は兵庫県養父市と包括的連携協定を結んだ。養父市は5月に指定された日本に6カ所ある国家戦略特区の1つ。他の特区が広域あるいは大都市であるのに対して、養父市は人口2万6000人で3分の1が65歳以上。人口減少と高齢化に悩む中山間地域の振興のモデルケースとなるか、注目を集めている。強力なリーダーシップで規制改革を進める広瀬栄養父市長と楠見晴重学長が、国家戦略特区における官学連携の在り方と可能性を語り合った。



◆特区申請の背景に、自治体消失の危機感

楠見 農業分野の国家戦略特区に認定されてから、養父市に大変注目が集まっています。養父市はなぜ国家戦略特区に申請したのでしょうか？

広瀬 養父市は中山間地域に位置するため、農業の大規模産業化は困難です。生産者はほとんどが小規模な兼業農家で高齢化も進んでおり、担い手の平均年齢は70代半ばを過ぎています。その方々が、先祖から引き継いだ土地を自分の代で終わらせる事ができないからと頑張っていたら、今は何とか農地を維持しています。しかし、後継者がいないというのが、今の養父市における農業の課題です。

体力的な限界もあり、あと数年すれば、今の担い手の方も農業を続けるのが難しくなります。その時に後継者がいなければ、耕作放棄地が増え、農地が荒廃します。

先祖が狭い土地を少しずつ耕しながら農地として開き、農産物を作り、家を建て、村ができ、町ができ、そして発展してきた養父市です。そのベースが今、崩れようとしていると言えます。今の農業の担い手がお元気なうちに、農地が荒れないような状況作りをおきたい。後継者を育てておきたい。それが今回、国家戦略特区を申請した根底にあります。

楠見 どのような改革を実行されようとしているのですか？

広瀬 基本方針は、耕作放棄地を解消して、農業振興を図っていきたくと考えています。そのためには、担い手をどのように確保するか。現在も農業をされている方が規模を拡大して農地を耕す、あるいは、集落全体で農地を守っていく集落営農を基本に、企業や新たに兼業で農業を始める方、自分の食べるものは安全安心なものを自分の手で作ってみたいという方など、多様な担い手にどんどん来ていただける仕組み作りを行っています。

楠見 具体的にどのような事業を計画されているのですか？

広瀬 5つの重点事業を中心に進めています。

1つ目は農地の流動化の問題です。従来、農地法により農地の転売や貸借は、農家や農協からなる農業委員会の許可が必要

とされ、手続きに時間がかかっていました。この許可の権限を市に移すことが決定され、10月から市役所で農地の転売・貸借についての実務を行い、事務の円滑化が既に実現しました。

2つ目は、農業資金融通の問題です。今まで、商工業者が農業参入する場合、農業部門については融資の対象外でした。これを中小企業庁と話し合い、農業も信用保証協会の対象となる仕組みを国が作りました。養父市では12月の議会で、関係する資金を予算化する予定です。

3つ目は、農業生産法人の役員要件の緩和です。企業等が養父市で農業を行う場合、地域の農業者と連携して農業生産法人を作らなければなりません。しかし、設立には役員の過半が農業常時従事者、更にその過半が農作業従事者という要件があり、このために他の地域の企業が作りにくい状況がありました。この役員要件を緩和し、既に市内外の複数の企業等が養父市の中で農業生産法人の設立に向けて動き出しています。

4つ目は、農地に農家レストランのような施設を造ることを、特区内に限ってできるようにしました。現在は、養父市が100%出資した「やぶパートナーズ」という地域公共会社と市外の企業が連携し、レストランを運営する農業生産法人を設立するための準備を行っているところです。

5つ目に、空き家となった民家を都市との交流施設、宿泊施設に使えるように、旅館業法の適用を緩和しました。3階建ての伝統的な養蚕農家の建物を地域の方々の了解を得て、2戸ほど入手できる予定です。来年度、レストランや宿泊施設に改装する計画が進んでいます。



兵庫県養父市別宮、鉢伏山の中腹に広がる棚田。約130枚もの田んぼが広がり、奥には兵庫県の最高峰「氷ノ山」を望む



兵庫県内では養父市でのみ栽培されている特産の「ネクタリン」



兵庫県の「コウノトリ野生復帰グランドデザイン」に基づき、飼育・繁殖・放鳥の取り組みを行っている

■対談

◆養父市は「中山間地域の星」となるか

楠見 事業は迅速に進んでいますね。養父市の試みは全国の中山間地域の良いモデルになるのではないのでしょうか。

広瀬 今、日本は人口減少社会になっています。しかし、東京を中心とする大都市ではまだ人口が増え続けています。それは地方から大都市に人がたくさん流入しているという事です。つまり、地方では国の平均以上に急激な人口減少が進んでいるのです。しかも、大都市に出ていく多くは若者です。地方では人口再生産力のある世代がどんどん少なくなっています。そうすると子供が更に少なくなる、という悪循環に陥ってしまうわけです。

養父市は中山間地域で、しかも全域が過疎地域です。全国に1700余りの地方自治体がありますが、その約半数が中山間地域にあり、養父市と同じように人が次第に減って、10年後、20年後に町がどうなるのかわからないという状況にあります。その地域の市町村長は、どうしたら人口減少を食い止められるか、恐らく夜も眠れないぐらい悩んでいると思います。



広瀬 栄 (ひろせ さかえ)
兵庫県養父市長。1947年兵庫県八鹿町(現養父市)生まれ。71年鳥取大学農学部卒。建設会社に勤務後、76年旧八鹿町役場に入り、商工労政課長、建設課長などを経て、2004年に旧養父郡の4町が合併して発足した養父市で都市整備部長、助役、副市長を務める。08年養父市長選に出馬し初当選。現在2期目。

養父市が国家戦略特区となって地域の活性化にどう取り組むか。基盤産業である農業の活性化を図る事によって、住みやすい活力のある町を作り、人口減少に歯止めをかけられるか。地方によって町作りの方法は千差万別ですから、養父市の方法が他の地域でもそのまま役に立つとは思いませんが、養父市の取り組みが良い成果を出せたなら、「養父市でもそこまでできるなら、自分の所でも良い事ができる」ということで、どんどん続いてくると思います。今回の改革は必ず成功させなくては、と思っています。

楠見 日本のような少子高齢化を経験している国は他にありません。日本はこの問題の課題先進国と言えます。この課題を解決する方策を、養父市が先頭に立って示していく事で、日本どころか世界のモデルになると私は思います。我々にとっても、世界で初めての課題に挑戦しようとしている自治体と連携協定



を結んだ事には、非常にやりがいを感じています。

◆「学」の成果を「官」と連携し社会に

楠見 大学の使命は教育と研究と社会貢献です。大学は単に教育や研究だけをしていけば良いのではなく、それをいかに社会に還元するかが大事です。特に関西大学の場合は、学是として「学の実化」を掲げています。社会への貢献の方法はさまざまですが、その中には地域の課題を、教員、学生、そして地域住民の方々と共に解決に向けて協力して行動していくという事があります。そこで、本学は養父市をはじめ、いろいろな地域と連携協定を結び、その地域の課題に取り組んでいます。

広瀬 今回、関西大学と連携させていただくにあたって期待しているのは、養父市の課題を“学”の力で学術的、論理的に明確に指摘していただくことです。これができれば、我々にとっては、非常に力強い味方になると思います。地域の課題を洗い出していただき、それに対して我々は矯正施策を進める。このような“官”と“学”の連携が正しく求められる事だろうと思います。更に大学という外からの視点で、中にいる我々には、なかなか見えない養父市の魅力、価値あるものを客観的に指摘していただければ期待しています。

楠見 今回の連携協定を結ばせていただくにあたっては、「農」が重要なキーワードになっています。「農」は「食」につながります。大学で食の研究と言えば、農学部が思い浮かぶかもしれませんが、本学では理工系3学部で食を扱っている先生も多く、農学とは違った視点で新しい取り組みをしています。これも関西大学の大きな特徴だと思っています。今回の連携も環境都市工学部の山本秀樹教授の農産物の高付加価値化に関わる研究がきっかけでしたね。

広瀬 養父市はピーマンの生産が非常に盛んですが、もう少し高付加価値化できる農産物を生産できないかと模索しているところに、山本教授からハバネロを作って特産品化してはどうかというご提案をいただきました。また、山本教授は工学的な技術を使って米を高栄養価の機能食に加工し、普通に炊いたお米の状態では食べられない人でも食せるように流動食の状態を提供する、といった研究もされています。養父市で取れるおいしいお米を、時代に合った加工を施し提供できるなら、それは願ってもない事ですから、山本先生にご協力をお願いしたというのがきっかけでした。

楠見 ハバネロを利用したソースなどの商品も既に販売されました。研究成果が生かされ、付加価値の高い商品の開発やハバネロの栽培が休耕地になるところだった農地の利用につながっ

ているのなら、大変うれしいです。本学としては研究・教育のフィールドを養父市に提供していただいているわけですから、更にバックアップを行い、地域の方々と良い関係を築いていきたいと思っています。

◆学生が地域に飛び込み学ぶ事の教育効果

楠見 学生達にはできるだけ養父市にかかわってもらいたいと考えています。学生が地域住民の方々と交わり、一緒に考える機会を得ると、学生は自分の知識のなさを痛感します。その経験こそが、自分から問題を見つけ、調べて、勉強していくといった能動的な学びにつながるのです。そこに一方的な座学からは得られない、高い教育的な効果が期待できます。養父市の皆さんには学生を快く受け入れていただけて感謝しています。

広瀬 学生さん達に来てもらうことは大歓迎です。養父市は高齢者が多く、伝統的な秋祭りでも氏神様の職を立てることすら一苦労するようになってきました。学生さんが一緒になって職を立てたり、巫女さんになっていただいたり、秋祭りはとてもにぎやかでした。学生の方々はちょうど孫の世代です。一緒に農作業をしてもらうのは、今の農業の担い手にとって、何よりも希望が湧く事です。

楠見 学生の発想は、我々とは少し違います。大人が気付かない視点で、養父市の魅力を見つけ出す可能性も高いと思います。今の時代は故郷を持たない学生も多いですが、かかわり続ける事によって、養父市を故郷のように身近に感じる可能性も広がります。結婚して子供ができれば養父市を子供と一緒に訪ねる、そういう事もあるでしょう。実際に2007年に提携協定を結んだ丹波市では学生と地域のつながりが深まり、丹波に定住した者もいます。



▲養父市広谷で開かれる「広谷観音祭」。地元小学生が伝統の傘踊りで練り歩く

◀春を告げる養父の祭り「お走り祭り」。約1800年前より行われ、無形文化財に指定されている

連携協定の中には、兵庫県立但馬農業高等学校の活動に大学としてサポートする事も含まれています。本学の高大連携センターは、「次代の人材育成」を目標に掲げ、高校生を対象としたプログラムをはじめ、幅広い年代を対象に大学の知を生かした連携プログラムを提供しています。将来的に、本学と但馬農業高等学校を結んで遠隔授業などもできるでしょう。高校でのインターンシップが実現すれば、学生が高校生と交流しながら、学ぶ事もできます。これは教員志望の学生には特にプラスになると感じています。

◆人口維持と農による経済活性化を目指す

楠見 最後に改めて、市長の抱負をお聞かせください。

広瀬 市の総合計画の中で、養父市の将来像を定め、テーマを「響きあう心 世界に拓く 結の郷 やぶ」としております。数値的な目標としては、人口はちょうど4年前の定住人口2万6000人とお勤めの方々、学生などを含めた市民規模(昼間人口)3万人を維持するとしております。人口の維持と地域経済の活性化は

大学は単に教育や研究だけをしていけば良いのではなく、それをいかに社会に還元するかが大事です。



楠見 晴重 (くすみ はるしげ)
1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国 Imperial College 留学。関西大学専任講師、助教授を経て、2002年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。公益財団法人大学基準協会理事、一般社団法人日本私立大学連盟副会長、国土交通省道路防災ドクター、土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」「アジア古都物語 京都一千年の水脈」など。

“官”だけでは絶対にできません。市民と協働で、“学”、“産”の力を借りながら実現していきたいと思っています。

楠見 関西大学としても、せっかく連携協定を結んだのですから、しっかりと継続的に取り組んでいきたいと思っています。今後ともよろしくお願ひします。

広瀬 ありがとうございます。今、地方に欠けている部分は、“知”です。知的なものがあれば、地方に住む若者も増えると思います。農業も非常に知的でクリエイティブな産業です。農業は本当に楽しく、知的なものだということをしっかりと示す事が必要だと思っています。それには学の力が必要です。関西大学という“知”の塊の力を借りて、活力があり、なおかつ知的なものがある、そういう町に養父市をしていきたいと考えています。

LEADERS NOW!



明日香村教育委員会

都塚古墳の発掘調査に参加

発掘調査技師目指し、貴重な経験積む

●文学研究科 博士課程前期課程 総合人文学専攻1年次生
上田 裕人 さん / 北嶋 未貴 さん

関西大学の初代考古学担当教授だった故末永雅雄名誉教授は、戦前、石舞台古墳の発掘調査を行った。その後任の故網干善教名誉教授は高松塚古墳の発掘調査を指揮した。どちらの古墳も奈良県明日香村にある考古学史上、重要な遺跡。そして、今年、本学と明日香村教育委員会文化財課が発掘調査を行った都塚古墳が大きな話題だ。この調査には発掘調査技師を目指す2人の大学院生も参加している。

奈良県明日香村の都塚古墳が、関西大学文学部考古学研究室と村教育委員会文化財課の調査によって、国内に例のない階段ピラミッド状の大型方墳である事がこの夏明らかになり、日本中の考古学ファンの関心を集めている。古代史に新しい光を当てたこの発掘調査には、文学部日本史・文化遺産学の米田文孝教授のゼミ生も参加。中でも、中心的な役割を担っているのが、大学院1年次生の上田裕人さんと北嶋未貴さんだ。

本格的な調査が始まった今年5月以降、上田さんと北嶋さんは、授業のない日や夏休みにはほぼ毎日、朝8時半から夕方5時まで現地で調査に携わってきた。

村教育委員会文化財課の職員と共に、遺跡発掘現場の作業員の間で“ガリ”と呼ばれる農具の両刃がまを使って土を削り遺構を掘り出す作業や、掘り出された遺構を測量し、図面を作成して記録に残すなどの作業を担当してきた。彼らの作成した図面は今後の研究の基礎的な資料として活用される事になる。8月16日、約4100人もの考古学ファンが詰め掛けた現地説明会では、案内役も務めた。

「都塚古墳は、1967年に関大が調査した古墳。ほぼ半世紀ぶりの調査に、関大生としてかかわれてうれしいです。授業や本だけでは分からない専門知識や技術を学ぶ事ができるのも発掘現場の醍醐味だと思います」と話す上田さんは兵庫県川西市出身。考古学好きの父に連れられて、小学生のころから地元兵庫県下はもちろん、各地の博物館や遺跡を訪ね、見学会や説明会に参加。明日香村にも何度も訪れた。大学で考古学を専攻したのも自然な流れだった。

北嶋さんが考古学の魅力に目覚めたのは中学生の時。職業体験授業で文化財保護に携わる専門家の話を聞いた時に、土器に触れた体験がきっかけだった。「千年以上も前に作られた物が、今もきれいに残り手に取れる事に感動を覚えました。今もその感動は変わりません。土器を見ていると自然にほほ笑んでしまいます」と笑う。今年3月には、大阪府立弥生文化博物館において、地元・静岡県西部の古墳時代の須恵器生産について発表も行った。

2人は今回の調査以前にも、関西大学がかかわる川原寺裏山遺跡(明日香村)や円満寺山古墳(岐阜県)などの発掘調査に参加し、着実に経験を積んできた。

2人が将来目指すのは、発掘調査技師。「幅広い年代を詳しく知り、広い視点を持った研究者になりたい」(上田さん)「地域に根差した研究者になりたい」(北嶋さん)と、それぞれの意気込みを語った。



上田 裕人—うえだ ゆうと
■1990年兵庫県川西市生まれ。摂津高校(現・早稲田摂津高校)卒。2014年関西大学文学部卒。関西大学大学院博士課程前期課程文学研究科総合人文学専攻1年次生。



北嶋 未貴—きたじま みき
■1991年静岡県浜松市生まれ。聖隷クリストファー高校卒。2014年関西大学文学部卒。関西大学大学院博士課程前期課程文学研究科総合人文学専攻1年次生。

古本ソムリエがご案内 本の世界の尽きない魅力

古本屋巡りがやめられなくなる

●古書善行堂 店主
山本 善行 さん —文学部 1982年卒業—

京都・今出川通りを東へ向かうと、白川通りと交差する少し手前に小さな古書店「古書善行堂」がある。店主は「古本ソムリエ」の異名をもつ山本善行さん。古本屋巡りの日々をつづった著書や本の面白さを紹介する文章も人気の最強古本ハンターだ。



本の魅力にはまったのは高校生のころだった。古書でしか手に入らない本が世の中にはたくさんあると知り、新刊で買うより安いのもあって、おのずと足は古本屋に向かい、やがて古本屋巡りがやめられなくなってしまった。

高校の同級に、現在、古本ライターとして活躍する岡崎武志氏がいた事も大きかった。2人は競うように京阪神の古本屋を巡り、見つけた本、読んだ本を披露し合い、語り合った。

学友にも恵まれ読書の日々を過ごす中、関西大学文学部に入学した。

「大学時代の思い出は円い建物の図書館(現在、関西大学博物館などがある簡文館)で、授業の合間に本を読んでいた事。あそこで『正宗白鳥全集』を第1巻から順に読んだ事が一番の思い出ですね。家内も関大生で教室で隣に座った学生でした。国文学の谷沢永一先生など、文学の研究者の講演はよく聴きに行きました。勉強は教えてもらうのではなく、自分でするものと思っていましたね」と振り返る。

学生生活の最後の年には、わざわざ京都に部屋を借りて通学した。もちろん、古本屋巡りをするためだ。卒業後は学習塾で中学生を教えた。職場は東大阪市だったが、京都に住み続け、片道2時間近くかけて通った。

「昼間に文章を書いたり、職場まで行く途中で古本屋を回ったり、ジャズ喫茶に入ったりしたかったから、仕事が夕方から始まる塾講師を選びました。仕事を終えて京都に戻ると深夜0時を過ぎることもありましたが、身体を清めるつもりで午前2時まで開いている古本屋をのぞいてから帰ったり。僕はこれを「古本浴」と呼んでいました」

古本に憑かれたような当時の様子は、著書『関西赤貧古本道』や『古本泣き笑い日記』に詳しい。

2004年に上梓された前者には「私の場合、本は売る程あっても、しかも毎日古本屋に通っていても、古本屋になりたいとは思わない」という一節があるのだが、山本さんは2009年、集めた本を元に古書善行堂を開店し、古本の売り手に転じた。



山本 善行—やまもと よしゆき
■古書善行堂店主。1956年大阪府生まれ。74年大阪府立守口高校(現・芦屋高校)卒。82年関西大学文学部卒。塾経営などを終えて2009年古書善行堂を開店。著書に『古本泣き笑い日記』(青弓社)、『関西赤貧古本道』(新潮新書)、『定本 古本泣き笑い日記』(みすのわ出版)。撰者として上林曉傑作小説集『星を撒いた街』(夏葉社)などがある。

「買い手を何十年もやってきて、よく頑張ったと自分を褒めてやりたいような達成感があり、次の人生として、本を読む楽しさ、買う楽しさ、集める楽しさを若い人に伝えたいという気持ちが生まれてきたのです。仕事を辞めて店を始めると言ったら、普通家族は不安に思うものだけれど、家から本が減ると、全く反対されませんでした。家の中は積み上げた本の山でテレビ画面が隠れたりしていたので、理解のあった家内もさすがに何とかしてほしいと口にする程の状態でしたから」

古書善行堂には学生から年配の方まで幅広い客が訪れる。古本屋は初めてという女性もいる。京都という土地柄か遠方からの来店者も少なくない。古書店の接客としては珍しく、山本さんはよく客に声をかけると言う。

「何回もご来店いただくと、その方の好みが分かってくる。常連のお客さんから『元気になる本を選んで』という電話があって、次の来店までにその人のこれまでに買った本や読んだ本から考えて、数冊選んで用意したこともある」と話す山本さんは、「古本ソムリエ」とも呼ばれる。最近では、上林曉、黒島伝治など、今では手に入りにくくなった作家の名作を、山本さんがセレクトしてまとめた傑作選も出版社から発行された。

「まだまだ知らない本がたくさんあって、驚きや発見の日々です。知識が増えれば増える程に楽しみが広がるのが本の世界」と話す山本さんは、売る側になってからも、やはり古本屋巡りを続けている。どこまでも広がる本の世界。その魅力に触れてみたいと思ったら、「古本ソムリエ」に相談するのも良いかもしれない。

■研究最前線

情報探索過程に関する研究

人は情報をどのように探すのか

情報探索の理論研究と図書館サービスの実践

◎文学部
渡邊 智山 教授

人は必要とする情報をどのように探すのか。渡邊智山教授は情報探索論をライフワークとして研究している。その理論的な研究の一方で、図書館が知の社会的装置として持続的に機能するべく、実践的な支援活動や提言を行っている。

■情報の研究へ文系からアプローチ

—図書館情報学とは、どのような学問ですか？
簡潔に言えば、図書に限らず、インターネット上の価値あるサイトも含め、「記録された情報」を中心に、その収集、分類、管理、提供、及びそれらを行う制度設計を考える学問です。その中でも、効率的に探すためにはどのような点に注意しなければいけないのかといった、情報探索のプロセスについての研究が私のライフワークです。

—図書館情報学に興味を持たれたきっかけは何でしょうか？
学生当時は、パーソナルコンピュータとインターネットが普及し始めた頃でしたが、情報管理や検索システムは工学系の研究という先入観があり、元々学生時代に国文学を専攻していた自分にとって、情報にかかわる研究は別世界の事として認識していました。しかしながら、図書館司書の資格を取るためのカリキュラムを受講した際、情報の内容や価値を見極める力(情報リテラシー)が非常に大切で、自然科学系の情報研究とは異なる切り口で「情報研究」にかかわれる事を知り、同時に、その視点が社会へ貢献する重要な基盤となる事に気付いたのです。その「気付き」の経験が、図書館情報学研究への契機になっています。

■図書館は知性を磨く社会のインフラ

—図書館というと、本を探して読むための施設、自習する空間というイメージがあります。
図書館は学びのためのインフラ、知性を磨く社会的装置です。識字率が100%に近い日本では想像しにくいですが、カンボジアやミャンマーなどでは、字の読めない人がたくさんいて、社会的な不利益を被っているという現実があります。その不利益を改善するため、「シャンティ国際ボランティア会」という国際NGOは、図書館事業や学校建設事業を中心に生涯学習の拠点や環境作りに取り組んでいますが、その活動を見れば、図書館の存在意義や可能性について改めて認識させられるでしょう。もちろん、カンボジアと日本では状況は違いますが、貧困など



によって子供たちの間に教育格差が生まれているという問題は、日本でも現実化していますし、その意味では、「知」を支える図書館の社会的使命は大きなものがあると思います。自らの意思に反し、学習困難な状況に陥ってしまった子供たちのために、また、常に学びたいと考えている人々のために、いつも開かれている「知の環境」を整備しておく事は、図書館が公共財、もしくは社会的共通資本として認められるための証明であると思います。

近年では、ビジネス支援情報、健康情報など、多くの図書館が、「図書」という枠組みだけでなく、多様なサービスに取り組んでいます。図書館が本を読む・借りるだけの場所ではなく、日常の小さな問題も含め、解決のために活用する「道具」が図書館なのです。

—図書館をもっと利用しても良いのですか。
図書館の重要な仕事は、過去の貴重な文化を未来へつなぎながら、記録情報を保管・保存する事ですが、図書館の真価は、利用されてこそ発揮されるのではないのでしょうか。知の継承は、物理的な資料だけでなく、人が「記録＝過去の経験」をどのように利用するかにかかっています。

—図書館に関連した取り組みも実践されているのですか？
図書館は、常に人々と共にあります。社会インフラとして機能するためには、変化し続ける社会状況に応じて、自らを進化させていかなければなりません。「絶えざる自己改革」が図書館の基本的なテーゼです。

2011年3月11日の東日本大震災をきっかけに、関西大学の教員有志と学生と共に、「あくせす・ほいんと」というボランティア活動グループを組織したのですが、その活動を通じて、図書館サービス充実化へ向けた実践を展開しています。

例えば、「あくせす・ほいんと」の活動には、(1)学校図書館への児童書の寄贈、(2)英語の絵本の読み聞かせ、(3)放課後学習支援、を主要なプロジェクトとして掲げていますが、これら内容のすべては、全国の公共図書館での「標準的な活動」にはなっていません。読書推進活動を支援する、多文化サービス活動を展開する、子供の貧困などの社会問題に対応し続けるとい

うのは、直接的に取り組むべき課題であると思いますが、経済的な問題(予算)・人的資源の問題(人事)などの問題から、図書館側に想いがあるても十分に取組む事ができていないのが現実です。「あくせす・ほいんと」の活動には、図書館を支援しながら、「学び」を支え続けたいという想いがあるのです。

■テクノロジーと融合する図書館

—最近の図書館にはどのような新しいサービスが取り入れられているのですか？
情報通信技術の進化が社会に変化をもたらし、生活状況も変容させています。結果、インターネット依存症などの精神疾患が急増したり、ネットを悪用した犯罪行為が後を絶たないのが、現実の情報社会であると思います。

しかしながら、情報通信技術の進化にはネガティブな面ばかりでない事は多くの人が知っているところです。図書館もまた、Social Network Servicesを活用した広報やコミュニティ作り、電子書籍を対象とした貸出サービス、ストリーミング配信技術を応用した音楽配信サービスなど、多くのテクノロジーによって進化を遂げてきています。

—図書館もどんどん変わるものなのですか？
—図書館もどんどん変わるものなのですか？
—図書館もどんどん変わるものなのですか？

—図書館もどんどん変わるものなのですか？
—図書館もどんどん変わるものなのですか？
—図書館もどんどん変わるものなのですか？

あくせす・ほいんと
<http://www.v-accesspoint.org/>

●特定非営利活動グループあくせす・ほいんと
東日本大震災をきっかけに、関西大学の教員有志と学生が設立したボランティア活動グループ。被災地復興支援のプロジェクトとして「本を贈る」活動を行い、2012年度からは対象を被災地以外の全国の学校図書館および関連施設へ広げている。生涯学習支援として「英語で読み聞かせプロジェクト」や学習支援を必要とする子供たちのために大学生のボランティアを派遣する「図書館文化支援プロジェクト」も展開している。

Information Search Process

研究最前線

文化資産のコンテンツ化の研究

大岡春卜の
絵巻物コンテンツを開発

浪花大阪をインタラクティブに情報発信

◎総合情報学部 林 武文 教授

大阪に生まれ、大阪に育てられた関西大学は、浪花大阪の文化資産に新たな光を当て、継承・発展を図る活動を進めている。この活動にかかわるのは歴史、文化、社会などの研究者だけではない。総合情報学部の林武文教授も、長年打ち込んできた人間の知覚についての研究と新たな情報処理技術の開発成果を生かし、淀川の絵巻物や大正時代の道頓堀の風景を題材にしたコンテンツを開発するなど、最新技術を取り入れた親しみやすい情報発信で大いに貢献している。

▼大岡春卜「浪花及瀬川沿岸名勝図巻」（関西大学図書館所蔵）



江戸の絵巻物と現在の淀川を往還する展示

— 関西大学図書館秘蔵の絵巻物「浪花及瀬川沿岸名勝図巻」を題材に、コンテンツを開発されましたね。

『浪花及瀬川沿岸名勝図巻』は、江戸時代中期の大阪画壇を代表する絵師・大岡春卜の作で、当時の淀川沿岸の様子を描いた全長約8メートルにも及ぶ絵巻物です。これを日立製作所の協力で超高精細デジタルデータ化し、そのデータから高品位のレプリカを制作した他、絵巻物に書き込まれた地名の文字にタブレット端末をかざすと、その場所の解説が聞けるARコンテンツ、絵巻物を舞台にしたゲームコンテンツ、絵巻物に描かれた淀川上空をGoogle Earthによって飛行する「フライスルーコンテンツ」などを開発しました。

— それらのコンテンツは一般にも公開されたのですか？

今年2月に関西大学社会的信頼システム創生センターと関西テレビが共同で、同社の扇町スクエアで開催した「淀川今昔明日ものがたり」で公開しました。これが好評で、5月には、グランフロント大阪のナレッジキャピタルThe Lab.で「淀川今昔明日ものがたりII」が開催されることになり、4Kカメラを使用してモーターパラグライダーで空撮した淀川沿岸の映像コンテンツを新たに追加して展示しました。この2つのイベントでは、巨大なモニターに映し出された絵巻物の超高精細画像を使って、美術史がご専門の中谷伸生文学部教授、社会学がご専門の与謝野有紀社会学部教授による解説も行われました。



巨大モニターに映された超高精細画像

他には、関西大学博物館での展示、オープンキャンパス、CGの国際会議SIGGRAPH 2014でも披露しています。

— どうして、絵巻物をコンテンツ化することになったのですか？

これはVOLCANOプロジェクトという本学の学内連携プロジェクトの活動として行ったもので、中谷教授、与謝野教授もプロジェクトメンバーです。このプロジェクトは、浪花大阪の文化資産の発掘と展示を行い地域の活性化に貢献することを目指しています。私はその中で、文化資産に新たな価値を付加するためにCGをはじめ、情報処理や可視化の研究成果を生かして、情報コンテンツを開発しています。

大岡春卜については伊藤若冲や円山応挙にも影響を与えた先駆者でありながら、日本の美術史から忘れられた絵師で、そういう存在の再評価を促したかったことがこの絵巻物を題材にした理由の1つです。また、実物の絵巻物が図書館の外に頻りに持ち出すことができない貴重な図書に、8メートルもあるので展示も容易ではありません。しかし、データ化すれば手軽に鑑賞できます。さらに、コンテンツ化することで郷土史や美術に関心がある方はもちろん、子供からお年寄りまで楽しみながら興味を持っていただけるだろうと考えました。

道頓堀の芝居小屋風景を学生と共に復元

— 他にも文化資産をコンテンツ化されていますか？

淀川の絵巻物についてはここ1年ほどの取り組みですが、その前に、2010年から本学大阪都市遺産研究センターの可視化プロジェクトとして、大正時代の道頓堀の景観CG復元に取り組んできました。

現在の道頓堀は“くだおれ”の街のイメージが強いですが、

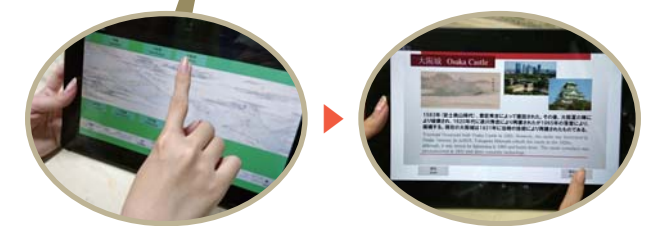


フライスルーコンテンツ

- ① 最新4K液晶パネルで上映された空撮映像
- ②・③ モーターパラグライダーで旧淀川上空から見た現在の映像を撮影
- ④ Google Earthによって上空を飛行する



AR（拡張現実）の技術を用いたタブレット端末



絵巻物（レプリカ）に書き込まれた地名の文字にタブレット端末をかざすとその場所の解説を聞くことができる

大正時代には道頓堀五座と呼ばれる芝居小屋が立ち並ぶ文化的な街でした。今では当時の景観は残っていませんが、古い地図や文献、写真などを基に、戎橋筋から堺筋までの間の五座と周辺の街並みを復元しました。この動画は現在、大阪都市遺産研究センターのサイトでご覧いただけます。このCGを発展させて、テレビゲームのようにコントローラを使って道頓堀の街を探索したり、画像や音声による解説、クイズなども楽しみながら、歴史学習や観光情報を得ることができるインタラクティブなコンテンツを、総合情報学部の学生達と一緒に開発しました。

— 学生達が開発にかかわっているのですか？

そうですね。総合情報学部には映像制作、プログラミング、コンテンツ開発などいろいろなことをやっている学生がたくさんいます。彼らに私が「こういうものを作ったら面白いんじゃないか」と投げかけると、彼らもアイデアを出す。そのアイデアをどんどん作り込んで、できあがると展示会に出すという感じで、コンテンツは学生が中心になって開発しています。開発の過程では地域の方々と交流する機会もあります。コンテンツを体験した人の反応を見ることで初めて分かる改善点もあります。講義だけでは身に着かない技術や知識を、実践を通じて得ることができるので、学生と一緒に取り組む素材としては、これは大変良いテーマだと思っています。



知覚研究の成果を生かした新しい歴史体験を

— 林先生は歴史も以前から詳しくはなかったのですか？

いえ、全くそんなことはありません。私は元々、NITの研究所に10年程勤めていて、そこでは工学的な数値計算をやっていたのですが、関西大学に来てからは、ヒューマンインタフェースの研究から、錯視や奥行きの認識、画面を見る時に人はどのように視線を送っているのかなど、人はどのように視覚情報を処理しているのかといった人間の研究を15年ぐらい進めてきました。コンテンツ開発も以前から少しずつ手がけていましたが、歴史や美術については大阪都市遺産研究センターに関わるようになって学び始めたところです。実は歴史は苦手だったのですが、最近、面白いと思えるようになってきました。

— 今後も大阪の文化遺産のコンテンツ化、情報発信の取り組みを継続していくのですか？

2016年に130周年を迎える関西大学の記念事業の1つとして、来年、「関西大学なわ大阪研究センター」が設立されます。このセンターは永続的な「大阪研究の拠点」として、人文、社会、情報、防災、理工学を統合した「総合科学」の観点から活動し、成果を外に発信していくとされています。このセンターで現在の取り組みを継続していければと考えています。

— 今後、どのようなコンテンツ開発、情報発信をしたいですか？

地元大阪の人でも知らない、忘れ去られようとしている文化資産を次世代にいかにつなげるか。そのために、一般の方にも分かりやすい可視化、情報発信を工夫していきたいです。

また、私がこれまでやってきた人間の知覚についての研究等の成果を総合的に投入して、新しい体験を提供する新技術のコンテンツも開発してみたい。例えば、視覚と触覚、嗅覚など人間の複数の感覚を組み合わせ、現実にはその場で感じないはずの錯覚を利用した表示などができれば、面白いだろうなと思っています。



梅田サテライト・オフィスがオープン

Satellite Office

新設の弁護士法人と連携し、新たなサービスを提供



●関西大学 梅田サテライト・オフィス (大阪市北区 梅田スクエアビルディング)

関西大学は11月、大阪市内における教育・研究活動およびキャリア支援にかかわる拠点として、交通至便な大阪市北区の梅田スクエアビルディングに、「関西大学 梅田サテライト・オフィス」を新設した。同オフィスには、広く一般の方を対象

に総合的な心理臨床サービスを提供する「関西大学心理臨床センター梅田カウンセリングルーム」と、在学生・卒業生への就職活動を支援する「関西大学キャリアセンター梅田オフィス」を設置。また、本学が開設を支援した「弁護士法人あしのは法律事務所」も隣接して設立される。

同事務所の代表弁護士は本学法科大学院の実務家教員であり、法科大学院との密接な連携のもと、法科大学院や法学部のより一層の充実に協力を得る予定。

それに先駆け10月24日、同オフィス13階大研修室セミナールームにて、池内啓三理事長、楠見晴重学長らによる記者発表が行われ、続いて、関係者対象の施設見学会も開催された。



●梅田サテライト・オフィスで行われた記者発表の様子

13F

▲オフィス内観

◀(上) 13階
キャリアセンター梅田オフィス
(下) 14階
心理臨床センター梅田カウンセリングルーム
弁護士法人あしのは法律事務所

天六キャンパス クロージングイベントを開催

85年の歴史に思いを馳せて



●池内啓三理事長によるあいさつ

9月3日、関西大学は大阪市北区長柄西1丁目にあった天六キャンパス(旧称:天六学舎)の閉鎖に伴う記念イベント「クロージングイベント ありがとう天六学舎」を開催した。

1929年に開設した天六キャンパスでは、長らく夜間教育が行われ、多くの優れた人材を輩出してきた。勤労学生の減少などにより、1994年に夜間部は千里山キャンパスに移ったが、それまでの65年間で約4万7000人も学生が巣立っていった。



◀働きながら学ぶ学生を支えた天六学舎

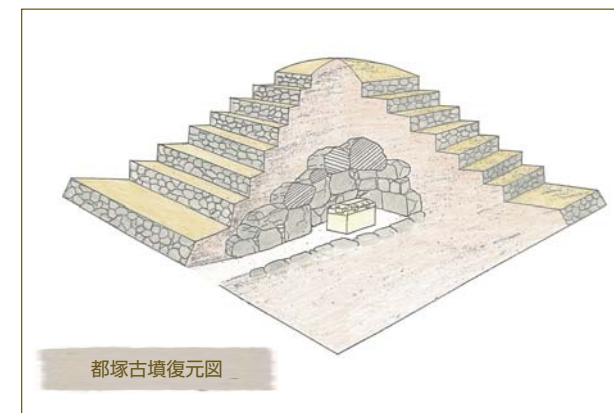
▶進退歌を斉唱



当日は、卒業生、地元関係者ら約350人が出席。式典では回顧ビデオで天六キャンパスのあゆみを振り返り、学歌を斉唱。その後、施設見学も行われ、歴史ある校舎との別れを惜しんだ。関西大学は2016年8月、より利便性の高い阪急梅田駅近くに、社会人教育の拠点となる梅田キャンパスを新設する予定だ。

●明日香村・関西大学による都塚古墳の発掘調査

国内で類例を見ないピラミッド形大型方墳と判明



都塚古墳復元図

8月13日、関西大学・米田文孝教授率いる文学部考古学研究室と明日香村教育委員会は、奈良県明日香村にある古墳時代後期(6世紀後半)の都塚古墳の外観が、国内で類例のない石を階段状に積み上げたピラミッド形と推定できることを発表した。

都塚古墳は全長約12m以上の横穴式石室を備え、長さ2.2mの家形石棺が納められていることは知られていたが、墳丘の詳しい形や規模は分かっていなかった。1967年の関西大学の調査

により方墳か円墳の可能性が指摘されており、今回の発掘調査で、墳丘部は拳大から人頭大の大きさからなる河原石を積み上げた階段状構造をもち、東西約41m、南北約42mの大型方墳であることが判明した。古代朝廷の実力者・蘇我馬子の墓とされる石舞台古墳に近いことに加えて、特異な構造や天皇陵にも迫る規模などから、馬子の父・蘇我稲目の墓である可能性も推測されている。



▲都塚古墳・墳丘西側の石積検出状況

16日には市民向けの現地説明会が行われ、早朝から4,000人を超える大勢の考古学・古代史ファンらが詰めかけて、ピラミッド状の形を決定づけた階段状の遺構などを熱心に見学した。

文部科学省・平成26年度の支援事業等に、本学の研究プロジェクト2件及び教育プログラム2件が採択

▼文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択された2つのプロジェクト

研究組織名	研究代表者(申請時)	研究プロジェクト名
データサイエンス研究センター	ソシオネットワーク戦略研究機構 商学部 教授 矢田勝俊	ビジネスにおけるデータサイエンスの深化を目指す総合的研究拠点の形成
経済実験センター	ソシオネットワーク戦略研究機構 社会学部 准教授 小川一仁	高齢者の意思決定支援制度を構築する開放型経済実験拠点の形成

▼文部科学省「大学教育再生加速プログラム」に採択されたプログラム

事業名称	事業期間	事業の概要
21世紀を生き抜く考動人 (Lifelong active learner)の育成	平成26年度～30年度	考動力育成に向けて教養教育と専門教育の連環を図るべく、交渉学・クリティカルシンキングをテーマとした科目開設やワークショップを実施。考動力を評価するための指標開発や、学修行動・到達度調査等による学修成果検証も行う。

▼文部科学省「高度人材養成のための社会人学び直し大学院プログラム」に採択されたプログラム

事業名称	事業期間	事業の概要
海外子会社の経営を担う人材を養成する大学院教育プログラム	平成26年度～28年度	産業界と連携し、ケーススタディ、事例分析等の実践的な教育プログラムを開発、実証し、海外子会社の経営を担う「考動力」あふれる高度人材を養成する。

◎カネカ、一栄、富士ハイテックとの共同開発

世界初！ エノキタケ由来不凍多糖の量産化に成功



不凍多糖・加熱前

不凍多糖・加熱後

- 高温加熱下でも氷再結晶化抑制活性に変化なし高い耐熱性を有している

不凍多糖無添加

不凍多糖添加

ピクル液(肉の味付けのために調味料や添加物などを調合した液体)に不凍多糖を無添加、添加して空揚げを作成し、冷凍保存(-18℃)。1カ月後に自然解凍したもの

ph6.68緩衝液

ph3.01緩衝液

- 酸性下でも氷再結晶化抑制活性に変化なし耐酸性を有している

関西大学とカネカは10月2日、冷凍食品の味や食感を保つ効果がある「不凍多糖」をエノキタケから抽出し、世界で初めて量産化に成功したと発表した。

この不凍多糖は、関西大学化学生命工学部の河原秀久教授と化学メーカーのカネカ(大阪市)、エノキタケメーカーの一栄(長野市)、機械メーカーの富士ハイテック(長野市)が、2010年から共同研究してきた成分。食品に少量注入すれば、冷凍しても内部で氷の結晶が大きくならないため、食品の組織が傷付きにくく、解凍しても風味や食感が損なわれないという。

河原教授とカネカは、同様の働きを持つカイワレ大根由来の不凍たんぱく質を既に商品化しており、麺類や餅などの冷凍食品約50品目に採用されている。この度開発された不凍多糖は、さらに耐熱性、耐酸性に優れていることから、冷凍揚げ物やヨーグルトなどに使用できるとして注目を集めている。10月中旬から国内食品メーカー向けに業務用サンプルの提供を開始しており、不凍素材製品として5年後には売上高10億円を目指す。

◎第19回「かんだい 明日香 まほろば講座」を開催

明日香村との地域連携事業で、川原寺をひもとく

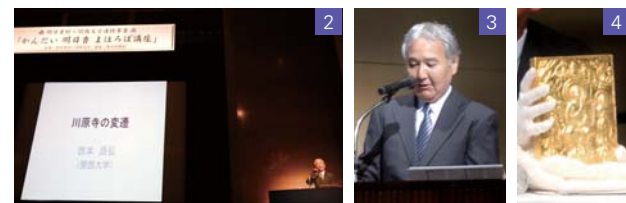


9月7日、関西大学と奈良県明日香村との共催による第19回「かんだい 明日香 まほろば講座」が東京・有楽町の朝日ホールで開催された。

関西大学と明日香村は、1972年に始まった高松塚古墳の発掘調査以降、緊密な関係を築いてきた。2006年2月には「地域連携に関する協定書」を交わし、本学の教育・研究の成果と日本の「まほろば」明日香村の持つ長い歴史と豊かな文化を活用した連携事業を推進している。

2008年度からは首都圏での地域連携事業として、飛鳥文化を通して日本の歴史・文化、そこに暮らす人々との交流について考える「かんだい 明日香 まほろば講座」を東京で開催している。

今回のテーマは「飛鳥の大寺院 川原寺 ～川原寺裏山遺跡発掘40周年～」当日は600人以上が参加し、かつて飛鳥四大寺に数えられた川原寺に関する調査報告をはじめ、京都国立博物館名誉館員・叡山学院教授の久保智康氏による講演「川原寺裏山遺跡出土品が語る古代の信仰空間」や九州国立博物館主任研究員の市元壘氏による講演「塑像研究の新展開」のほか、専門家によるパネルディスカッションが行われた。また、現在、明日香村で進められている都塚古墳の調査報告もあった。



1 600人以上が参加した「かんだい 明日香 まほろば講座」
2 川原寺の調査報告を行う西本昌弘教授(関西大学文学部)
3 川原寺の史跡
4 川原寺裏山遺跡から出土した「三尊佛」のレプリカ

◎今年も大規模避難訓練を実施

関大防災 Day2014 ～広がり！みんなの安全・安心！～



●千里山キャンパスで開催された防災講演会

関西大学では、毎年秋に各キャンパスで「関大防災Day」を実施している。今年は10月21日、千里山・高槻・高槻ミュージック・堺の4キャンパスで同日時に開催され、学生・教職員・近隣住民ら約1万人が、地震避難訓練および安否確認訓練に参加した。

千里山キャンパスでは防災講演会も開催され、大阪赤十字病院 国際医療救済部長 兼 呼吸器外科部長の中出雅治氏が「東日本大震災における災害医療」[南海トラフ巨大地震への備え]をテーマに二部構成で講演。自身の経験を交えて、日々進化する

日本の災害医療の現場や、災害への備えについて熱く語った。さらに各キャンパスにおいて、炊き出し訓練や煙体験、避難器具体験、浸水時ドア開閉体験のほか、学生に対して「緊急連絡メールシステム」を利用した安否確認を初めて実施するなど、災害に対する意識をさらに高める一日となった。

▼(左) 避難器具を使用しての降下避難を体験 (右) 学生・職員・近隣住民が共同で実施した炊き出し訓練 (右) 学内で避難時に記入する「安否確認シート」



◎関西大学協賛の「大阪マラソン2014」開催
関大生ボランティアが大活躍

10月26日、今年で第4回目となる「大阪マラソン2014」(大阪府・大阪市・一般財団法人大阪陸上競技協会主催)が開催された。沿道には約130万人が詰めかけ、14万5,473人の応募より選出された約3万人のランナーに熱い声援を送った。

関西大学は第1回から協賛団体として大会運営に協力し、地元「大阪」を盛り上げるためにさまざまな形で貢献してきた。今大会も給水ボランティア約400人が5kmと35km地点の給水所を担当。ランナーが給水カップを確実に受け取れるよう万全の態勢で臨み、抜群のチームワークで対応した。



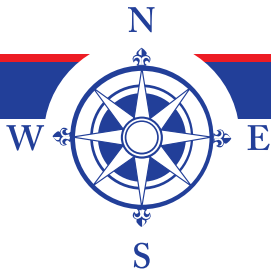
約400人の学生が協力した給水ボランティア



①オリジナルウェアで力走する関大生
②チャリティー募金ボランティア
③語学対応ボランティア
④中央公会堂前の沿道でエールを送る応援団



国語に精通した合計30人の語学対応ボランティアが外国人ランナーらの問い合わせに対応。昨年に続き、チャリティー募金ボランティア活動も行い、チャリティーマラソンという大会精神のアピールにも貢献した。また、沿道から熱い声援を受けた関西大学特別参加のランナー20人は、本学オリジナルウェアを着用して力走を見せた。



オンライン教育サービス JMOOC「gacco」で「化学生命工学が作る未来」の配信を開始

JMOOC(日本オープンオンライン教育推進協議会)の公認配信プラットフォーム「gacco」において、10月23日、関西大学化学生命工学部が提供する講座「化学生命工学が作る未来」の配信が始まった。

「gacco」は、大学教授陣による本格的な講義を誰でも無料で受けられるウェブサービスで、公開された講座を受講し、修了条件を満たすと修了証を取得できる。

この度の講座では、21世紀の「ものづくり」と「先端技術」の発展に向け、最前線で活躍する研究者―上田正人准教授、石川正司教授、岩崎泰彦教授、河原秀久教授が4週間にわたる講義を行った。また、11月29日には千里山キャンパスにて、オンライン学習後の対面授業(有料)も行われる。

「吹田市5大学吹田観光ポスターコンクール」社会学部の山本洋帆さんが大賞受賞



吹田にぎわい観光協会主催の「吹田市5大学吹田観光ポスターコンクール」において、山本洋帆さん(社2)の作品が大賞を受賞し、9月2日、吹田商工会議所にて表彰式が行われた。

このコンクールは吹田市内にある関西大学、大阪大学、大阪学院大学、千里金蘭大学、大和大学の5大学を対象に実施され、学生の視点を生かしながら吹田の観光と吹田市のイメージキャラクター“すいたん”をPRすることで、地域振興に寄与する事を目的としている。山本さんの作品は、市内各駅のほか、近隣市の駅などに掲示されている。

リクルート「進学ブランド力調査2014」で本学が関西エリアの「志願したい大学」第1位に

株式会社リクルートが実施した「進学ブランド力調査2014 高校生に聞いた大学ブランドランキング2014」において、関西大学が関西エリアの「志願したい大学」と「知っている大学」でそれぞれ第1位となった。この調査は、関東・東海・関西エリアの高校に通っている2015年3月卒業予定の7万4000人を対象として実施されたもの。関西エリアで本学は、7年連続して「志願したい大学」第1位を獲得した。

関西大学体育会が各方面で大活躍!

● 第17回アジア競技大会で、空手道部の清水希容さんが金メダル

10月2日、韓国・仁川で開催された第17回アジア競技大会で、体育会空手道部の清水希容さん(文3)が女子形の部で優勝した。初戦の準々決勝から3試合をいずれも5-0で下し、見事、金メダルを獲得。これにより、女子形において日本勢は6大会連続で金メダルを獲得したこととなった。



● テニス部の竹元佑亮さんが世界ランカー入り

9月29日からスペイン・サバデルで開催されたテニスITFフューチャーズのサバデルオープンにおいて、日本から主催者推薦で出場した体育会テニス部の竹元佑亮さん(商1)が初戦に勝利。自身初となるATPポイントを1ポイント獲得し、世界ランカー入りを果たした。



写真提供：関大スポーツ編集部

● 第62回関西学生剣道優勝大会で、剣道部男子が優勝

9月28日、大阪市中央体育館で第62回関西学生剣道優勝大会が開催され、体育会剣道部男子が45年ぶり6度目の優勝を果たした。決勝は大阪体育大学と3対3、1引き分けとなり、勝敗を決する代表戦で主将の山田侑希さん(社4)が勝利し、関西王者の座を手にした。



写真提供：関大スポーツ編集部